■漢字だとよく解る

漢字で書ける言葉を全部漢字で書いたら、一年生にはとてもついて行けないだらう、と心配しがちであるが、実は漢字が多い文ほど解り易いのである。私が初めて小学校の一年生を担任した時、教科書に“さくぶん”といふ言葉が出て来たので、これを“作文”といふ漢字に直し、この言葉の意味を説明しようとしたところ、子供たちの方から、「先生。その字『作る文』って読めるね」「それ『文を作る』って事ぢゃあないの」と言ったものである。“さくぶん”に続いて出て来た“ぶんしゅう”といふ言葉も、“文集”と漢字に書き直すと、直に、『作文を集めたもの』と理解してしまった。“さくぶん”や“ぶんしゅう”のままだったら、説明してやってもなかなか理解してもらへなかったと思ふが、“作文”“文集”といふ漢字表記のお蔭で、説明せずに済み、子供たちもどんなうまい説明よりよく理解できたやうであった。

また、“どうぶつえん”といふ言葉が出て来て、“動物園”に書き直した時の事である。「先生。“動物”って『動く物』って読めるね」と言ったので、「さう。生き物には、桜の木やチューリップの花のやうに、動くことが出来ない物と、象さんや猿さんのやうに動くことが出来る物とあるんだよ。それで、動くことが出来る生き物は『動く物』と書いて“動物”と言ふことにしたんだよ」と教へてやった。すると、「ぢゃあ“金魚”も動物なんだね」「“蟻”さんも動物なのか」「先生。“人間”も動物なの？」と、子供たちから驚きの発言が続出したものである。

四･五年生になっても、“動物”といふ言葉は“獣”と同義語のやうに思ってゐる者が多く、“魚”や“虫”と並列の言葉だと思ってゐる者が多い。ところが、一年生でも、“動物”といふ表記で学習すると、このやうに“動物”が“魚”や“虫”の上位概念であることがちゃんと理解できるやうになる。だから、一年生にとっても、漢字の多い文章の方が解り易いのである。これは、私が一年生に試してみて初めて解った事であり、試してみなかったら決して解る事ではないと思ったものである。